大きな聲で終りまで讀む。無想庵は好く解ると言つた。

『しかし、斷言し否定すると言つたら、辻潤なんか、一切を否定するものは一切を肯定する位に思つて片づけるもんですからやりきれません。

無限と無とタバコと單語と同音に響く。ニヒリストと、ダヴイストを對立させて考へるような低能が居ますから』

『君は春夫の顏よりもトガツて居ない好い顏をしてゐるよ、此の間ビヤズレーの原稿紙で手紙を寄こしてゐたがね。

白鳥が君は好きなのかい、アレは手固いナタ豆煙管で根が百姓だからね。

こないだ辻潤のところへ行つたら、辻潤は居なくて、吉田と言ふプロレタリア作家が居て、是非僕のところへ來て見てくれと言ふので、自分の全集を出す時の心配なんかしてゐるんだ、それから逐々桂公の愛妾がやつてゐるナショナル・カフェーへ連れて行つて、酒を飲ましてやつたがね』

二時間ばかり話した。

『一週間ばかりしたら、僕も大阪へ行くよ、嬶アが高島屋で、帽子の廉賣をやるんで、看板に入